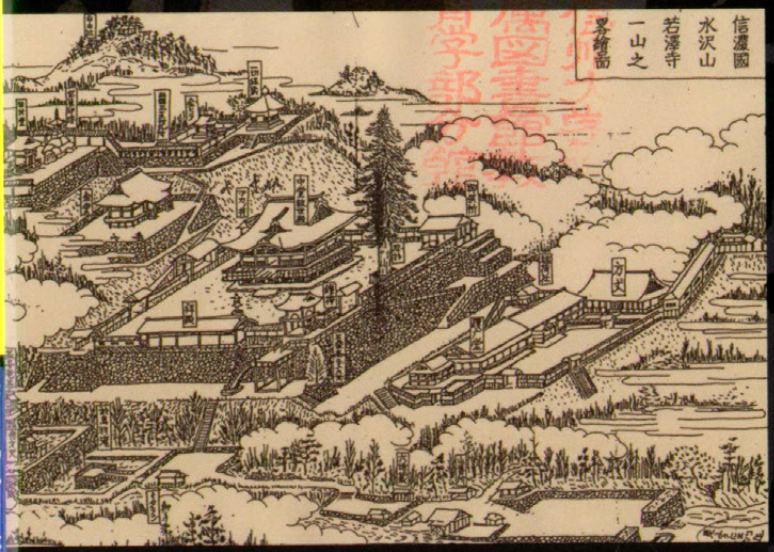
信濃の風土と歴史⑫

いのる人びと

―信仰と祭り―



長野県立歴史館
Nagano Prefectural Museum of History

はじめに

12冊目のブックレットとなる今回は、「いのる人びと－信仰と祭り－」と題して、縄文時代から現代まで、豊かなみのりや家族の幸せ、ときには戦いなどにたいして、さまざまな思いで祈った人びとの歴史について長野県を中心にまとめてみました。

現代では、多くの人は霊魂の存在を信じない傾向にありますが、以前の日本の社会においては心や魂は肉体から独立した存在であり、あらゆるものに霊魂の存在を信じるアニミズムや神道、あるいは仏教を信じる人びとは霊魂の不滅を信じていたと考えられています。

縄文人は豊かな生活を実現させるための再生の祈りやまつりを、水田稲作農耕が始まった弥生時代には豊作を祈り、収穫に感謝するまつりがおこなわれました。古墳時代になると有力者は古墳を造り、王の葬儀が最大のまつりとなりました。古代になって、百済から仏教が伝来すると国内でも寺院が建立されました。千曲市社宮司（しゃぐうじ）遺跡から日本で初めて出土した六角木幢（もくどう）のようなものを拝むことも平安時代末期には始まったようです。

また、長野県における代表的な仏教信仰としては善光寺信仰があり、諏訪信仰も古代から連綿と続き、現在でも盛大な祭りがおこなわれています。

第二次世界大戦後は日本国憲法に掲げられた「思想・良心の自由」「信教の自由」のもと、祈りのかたちも多様になりました。反面、物質主義優先ともいわれる現在において、祈りや祭りの衰退も進んでいるのではないでしょうか。

文化の根本は宗教（そうきょう＝根本の教え）と言われますが、この冊子を通して、心を振り返り何かを学ばれることを願っています。

長野県立歴史館館長　　瀬良　和征

目　次

いのる人びと

―信仰と祭り―

はじめに 1
目　次 2

縄文人の祈りと願い 4
土器と土偶にみる縄文人の祈り 6
弥生時代の祈り 8
峠の祈り、人びとの願い 10

善光寺信仰の広まり 12
諏訪信仰の広がり 14
氏寺から国家の寺院へ 16
仏像に込めた願い 18
信濃出身の高僧 20
神仏習合と修験道 22
古代のさまざまな祈り 24
戦国武将の祈り 26

善光寺信仰の広まり 28
江戸時代の諏訪神社 30
檀那寺と鎮守社 32
信仰の旅 34
町場の祈り 36
村の祈り 38

廃仏毀釈 40
キリスト教の広がり 42
戦時下の祈り 44
明治以後の善光寺 46
諏訪社の今 48
現代の祈り 50

参考文献 52
協力者のみなさん 53
あとがき・利用案内・奥付 54

※この本の表記について
・小学校で学習する漢字以外は原則としてふりがなをつけました。
・資料所蔵者や資料提供者の敬称は省略しました。
・市町村名は2006年３月24日現在のものとしました。

縄文人の祈りと願い

手形と足形の土版
（青森県埋蔵文化財調査センター蔵）　青森県大石平遺跡
重要文化財
子どもの成長を願ってだろうか、乳幼児の手と足の形を粘土につけて焼いている。手の長さ8.5cm。

顔面把手付深鉢形土器
（山梨県北杜市教育委員会蔵）　山梨県津金御所前遺跡
土器の内側を向く顔は母親、胴部の顔は生まれ出ようとする子どもの顔である。胴部が膨らんだ土器は煮炊きの道具であると同時に神聖な妊娠した女神像として崇められたのではないだろうか。高さ57cm。

◆縄文人の生活

縄文時代は狩りや漁、植物採集をおこなって生活をしていた時代です。縄文社会は、狩猟採集活動に大きな影響を与える四季の変化と、人の誕生から死にいたる通過儀礼（人生儀礼）にともなう時間の流れがありました。

狩猟採集の成果は、そのときの気候に大きく左右されます。縄文人たちは四季により変化する自然のなかに神を見いだし、豊猟を祈ったり、感謝する呪術や儀礼・まつりがありました。

人生儀礼では人の誕生や成人、結婚、死者に対する縄文人の祈りや願いという豊かな精神世界がありました。

◆「ハレ」と「ケガレ」

縄文人の日日の生活は狩猟採集などの日常的な生活「ケ」と、豊かな生活を実

狩猟文土器　（青森県埋蔵文化財調査センター蔵）　青森県韮窪遺跡　青森県重宝

クマに向けられた弓矢は当時の狩猟を物語っている。
高さ26.2cm。

甕を被せられて葬られた縄文人
（当館蔵）　安曇野市北村遺跡

死者のケガレが地上に出ることを防ぐためか、腕と脚を折り曲げられ、頭部には甕がかぶせられている。
推定身長159.6cm、成人男性。

現させるための祈りやまつりをおこなったり、結婚・出産などを祝う非日常的で清浄な「ハレ」、そしてけがや病気・死という不浄な「ケガレ」に大きく分けられます。

ハレとケガレのときには、さまざまな儀式、儀礼、呪いがあり、イエかムラのどちらかの単位でおこなわれました。

とくにハレの日は普段とは違う特別な場所で、晴れ着を着て、特別な器で特別な料理を食べ、仮面をかぶった人が登場し、太鼓・笛などの楽器の音にあわせた踊りなどをおこない、神と人とがかかわりながら特別な活動する日でした。

（宮下健司）

土面　（東京国立博物館蔵）　波田町権現台地籍　複製

土でつくられたお面。「ハレ」の日にかぶられたのだろうか。

土器と土偶にみる縄文人の祈り

神像筒形土器
（井戸尻考古館蔵）　富士見町藤内遺跡　重要文化財
土器を抱きかかえるかのようにつけられた上半身の造形は、神秘的でエジプトのツタンカーメンの棺を思わせる。頭は蛇のような文様、その下に２つに束ねられた髪の毛が表現されている。腕の先と下半身は胴部の文様と一体化して土器のなかにとけこんでいる。高さ55.7cm。

◆土器に描かれた神

縄文人が生みだした造形美のなかでその心情や宗教心がもっともあらわれているのが、柔らかい粘土でつくられた土偶や土器です。数ある土偶のなかには大型で完全な形で出土する神像的な土偶があり、土器のなかにも神をイメージさせるものがあります。神の姿はかならずなんらかの人間的な属性をもっています。それは人間が、神を人間の形として考える以外には考えようがなかったからかもしれません。

長野県から山梨県にかけては縄文時代の中期に人面装飾付土器が多く出土します。これには特別な日の煮炊きに使われた人面付の深鉢形土器、酒をつくったり、太鼓に使われた有孔鍔付土器、燈火具の香炉形土器があります。

◆土器に表現された女と男

縄文時代の遺物には粘土や石でつくられた男性・女性の象徴があります。そこには新たな生命の誕生への想いやそれに関連させた豊饒への祈りや願いが込められています。人面装飾付土器は胴部が膨らんでいることから、土偶と同じように妊娠した女神と考えられ、それにたいして三角形の頭をもつヘビは男神と考えられています。

土偶・土器、仮面などの造形、音楽、踊りは、まつり・儀礼という一つの複合

動物装飾付香炉形土器

（当館蔵）　富士見町札沢遺跡　県宝

釣手の上に３匹、器の縁に１匹、合計４匹の蛇が付けられている。蛇は３角形の頭を持ち、胴体が短く「ツチノコ」のようにみえる。高さ16.6cm。

有孔鍔付土器

（井戸尻考古館蔵）　富士見町藤内遺跡　重要文化財

有孔鍔付土器は、酒造容器との説がある。酒の発酵のようすを調べるために口をしばった皮革をポンポンと打ってもみることから、太鼓が生まれ、この土器は太鼓としても使われた可能性がある。カエルは「女神」をあらわしているとの考えがあり、人とカエル合体像から神話の誕生を知ることができる。女神の体から出る不思議な飲み物（酒）に酔い、いのりや呪いをおこなったのだろうか。高さ51.8cm。

体のなかに混ざりあう、縄文人の世界観の反映であり、それを取り巻く縄文の技術であったといえます。　（宮下健司）

弥生時代の祈り

大阪府池上曽根遺跡の弥生時代の鳥形木製品
（大阪府立弥生文化博物館蔵）
抉り込みがあり、背面には胴部に直交する羽、腹部には棹を差し込むことのできる穴があけられていることから立てて使われたらしい。この鳥の形態は古墳時代以降も受けつがれていった。

千曲市屋代遺跡群の奈良時代の鳥形木製品
（当館蔵）

長野市石川条里遺跡の古墳時代前期の鳥形木製品
（当館蔵）

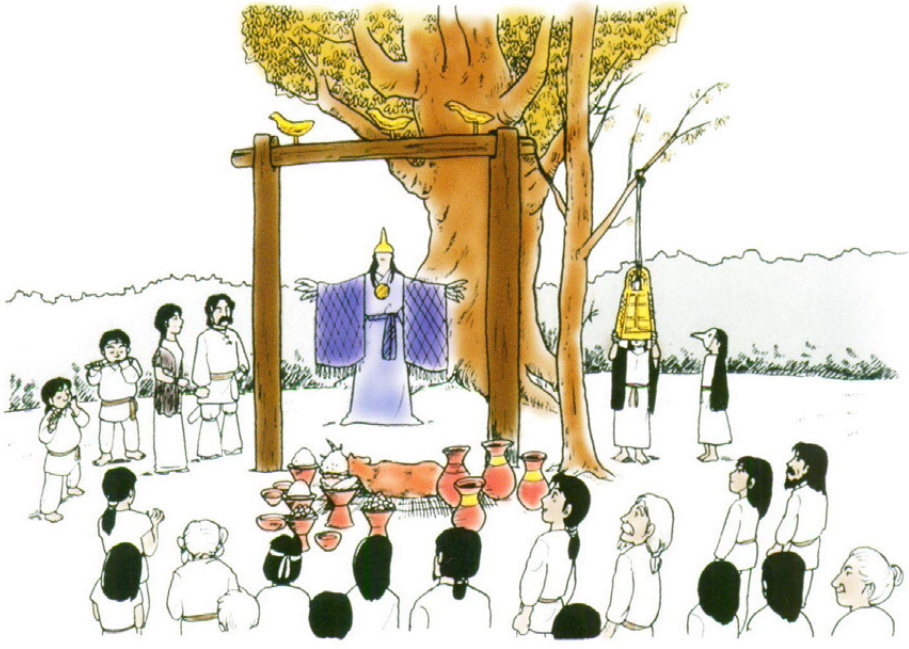
弥生時代中期の銅鐸
（兵庫県桜ヶ丘５号銅鐸　神戸市立博物館蔵）　国宝
銅鐸の画材は鹿がもっとも多く、人や鷺がそれにつぐ。左下の区画には魚をくわえている鷺、右下には臼に入れた稲穂を杵でつく人物が二人描かれている。

◆豊かな実りへの祈り

弥生時代になると本格的に水田稲作農耕が開始されます。日本列島に住む人びとの間に新たな生活様式や精神文化が形成されていきました。豊か実りへの祈りは、弥生人の残した道具をとおして読みとれます。

鳥の形をした木製品は、東北アジアに広がる習俗などから、穀物や祖先の霊を招く象徴と考えられています。銅鐸は「まつりの鐘」として、打ち鳴らされたともいわれています。

大陸からの伝来当初は実用品も存在した青銅製の剣・戈・矛などの武器は、鉄器の普及などとともに性格を変え、大型化して祭器となりました。邪悪なものを倒し、追い払うようなマツリに使われたのでしょうか。



収穫のまつり
（さかいひろこ画 浅間縄文ミュージアム提供） 御代田町誌歴史編上より
仮面をつけた司祭者の女性の前に今年の収穫物が集められ、ムラ人が集まっている。

◆「赤い土器のクニ」の祈り

弥生時代後期、千曲川流域には煮炊きに使う甕以外のすべての土器を赤く塗る独特な箱清水式土器がつくられました。

生命力に通じることなどから特別な象徴とも考えられる赤色が、日常生活の中で多く使われていたのです。

当時の米は赤米といわれています。赤への固執は、やはりこの時期本格化した稲の豊かな実りへの祈りとも関連するのでしょうか。大型の壺や甕は幼児や乳児を葬るための土器棺にも転用されています。

凶作の不安と豊作への願いは、人びとをまじないや占いへとかり立てます。鹿の肩甲骨に熱く焼いた火箸を押しつけ、それによってできるひびの入り方で吉凶を判断する占いも大陸から伝えられ、盛んにおこなわれました。　（水沢教子）

長野市榎田・松原遺跡出土土器と赤米
（赤米は徳永哲秀氏提供　当館蔵）

千曲市生仁遺跡出土占いに用いた鹿の骨
（千曲市教育委員会蔵）

峠の祈り、人びとの願い

長野市石川条里遺跡
遺物出土状況
（当館蔵）

松本市高宮遺跡　（松本市教育委員会蔵）
ごく限られた範囲から高杯、ミニチュア（手捏ね）土器、多種多量の玉類、石製模造品、鉄鏃などの鉄器類、土製勾玉などが出土した。

神坂峠から木曽側をみる
（押野谷美智子氏寄贈　当館蔵）

古墳時代のおもな祭祀遺跡の分布

腕輪形石製品・碧玉製石製品
（当館蔵）　長野市石川条里遺跡
石川条里遺跡では幅13mの溝や溝に囲まれた土坑から大量の土器・木製品、古墳の副葬品を思わせる車輪石・石釧・玉杖を含む装身具類、ガラス小玉等が出土しています。豊作への願いもしくは王位継承に関わる儀式の場所が推測されている。

滑石製模造品（押野谷美智子氏寄贈　当館蔵）　神坂峠

◆古墳と峠のまつり

古墳時代になると、地域の有力者（王）は大きな墓（古墳）をつくりました。古墳には埴輪が置かれ、王の葬儀や交代の儀式がおこわれました。

一方、交通や生産、水に関するまつりが、ムラやムラを離れた峠の道、巨石の岩陰などでもおこなわれました。

神坂峠（阿智村）は三野国（美濃・岐阜県）との境にあり、シナノと畿内をつなぐ重要な道の難所にあたりました。ここからは、鏡・剣などをまねてつくられた石の模造品（石製模造品）が出土しています。関東へ通じる入山（碓氷）峠も同様で、これらの峠では、旅の安全を祈るまつりが、石製模造品を使って、おこなわれたのです。

中野市新井大ロフ遺跡
（中野市教育委員会提供）

送水管の埋設工事中に大量の土器がみつかった。高杯が多く、勾玉などの玉類も出土している。湧水地点でおこなわれた農耕のまつりの跡と考えられる。

屋代遺跡群子持ち勾玉
（当館蔵）

大型の勾玉の表面に、小さな勾玉（突起）を作りだしたもの。集落のまつりの場所から出土する例も多く、まつりに利用された道具と考えられる。

坂城町青木下遺跡Ⅱ（坂城町教育委員会提供）

◆ムラと巨石のまつり

青木下遺跡Ⅱ（坂城町）では大量の土師器・須恵器を最大で直径８ｍにもなる環状に並べた跡が17か所、発見されました。全国的に例のない地域のムラまつりの跡と考えられています。

飲み水や農耕に欠かすことのできない水は、反面、洪水や河川の氾濫をもたらします。豊かな恵への感謝と災害への鎮めの祈りが、ムラや湧水地点などの水辺でおこなわれました。

大きな岩や木などは、神が宿る特別な場所と考えられました。鶴萩七尋岩陰遺跡（長野市）では、巨石の岩陰にまつりに使った管玉や石製模造品などが出土しています。（岡村秀雄）

長野市鶴萩七尋岩陰遺跡（当館蔵）

両手を広げた長さを「尋」といい、名のとおり七尋もある巨石に、人びとは、祈りを奉げた。

鶴萩七尋岩陰遺跡出土品
（左下：骨鏃　上：管玉　右下：石製模造品　当館蔵）

善光寺信仰の広まり

善光寺を参詣する武士と子どもに案内される女性
（「一遍上人絵伝」 原資料清浄光寺蔵） 複製

伝曽我十郎・虎御前像（山梨県南アルプス市 諏訪神社蔵）
愛する十郎をとむらうため、大磯の遊女虎は出家して善光寺を訪れた。県内には虎にまつわる伝承が多い。

虎御前をまつったと伝えられる供養塔
（左：須坂市井上区　右：須坂市八幡区）

◆女性を救う寺

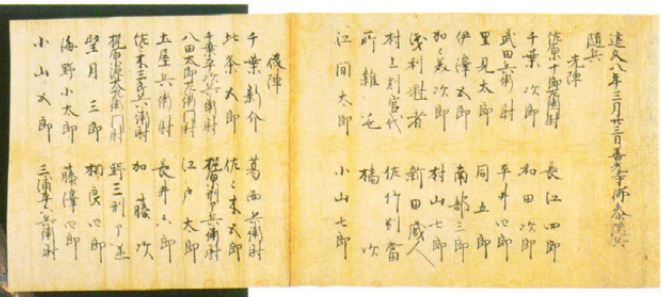
「牛に引かれて善光寺参り」という言葉を知っていますか。年老いた女性が牛に導かれ善光寺を訪れて極楽往生できた、という説話とともにこの言葉が流行しました。善光寺は女性を救う寺というイメージが強かったのです。

平安時代の仏教は、貴族がお堂や仏像を造りひたすら阿弥陀如来に救いを求め清らかな極楽へ行くことを望んだ点に特徴があります。今まで仏教は一般の人、あるいは女性には縁がないものでした。

鎌倉時代になると、突如善光寺信仰が広まります。その理由のひとつに、男性だけでなく女性も極楽にいける「女人往生の寺」として善光寺が知られるようになったことがあります。鎌倉時代はじめ曽我兄弟の仇討に登場する曽我十郎の愛人虎御前は、十郎の菩提をとむらうため出家し善光寺を訪れます。源頼

源頼朝坐像　（甲府市　善光寺蔵）　山梨県指定文化財

善光寺を復興した頼朝を讃えるためつくられたという。武田信玄により甲斐国（山梨県）善光寺へ本尊とともにうつされた。



頼朝の善光寺参詣を伝える古文書

（慶応義塾大学蔵）　重要文化財

頼朝は善光寺を御家人とともに訪れた。

善光寺式阿弥陀如来三尊像　（小諸市　大雄寺蔵）

鎌倉時代建立された落合新善光寺（佐久市）の本尊だった。新善光寺をつくる動きは全国に広まっていった。

朝の妻北条政子や後深草上皇に仕えた二条など善光寺を篤く敬った女性は数多くいます。

◆武士の悩みを解消

武士から広く信仰を集めたのも善光寺の特徴です。殺生をおこなわざるをえなかった武士でも念仏を唱えることで阿弥陀如来の救いを得られると解釈する宗派があらわれ、武士に受け入れられたのです。頼朝は源平合戦で荒れた善光寺を再建し、1192年（建久８）に参拝したといいます。武家出身で時宗を開いた一遍上人も寺を訪れました。さらに武士は自分の所領に新善光寺をつくったりしました。

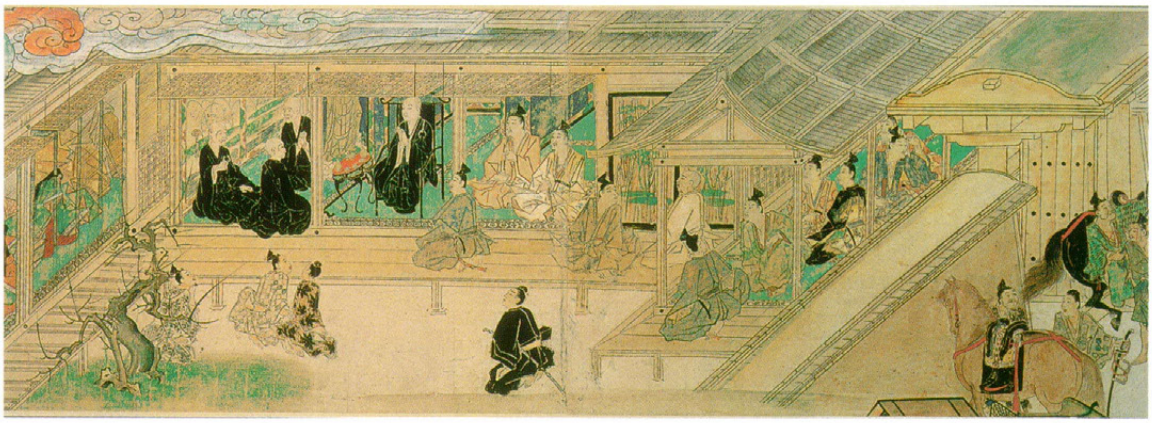
戦国時代以降、善光寺の阿弥陀如来は武田信玄や豊臣秀吉など戦国大名や時の権力者によって各地に持ち去られました。地獄にいきたくない悩める武士でも極楽へいける、と説く善光寺はまさに救いだったのでしょう。　（村石正行）

大井光長

（「一遍上人絵伝」原資料清浄光寺蔵）　複製

一遍上人は鎌倉幕府御家人大井光長の邸宅を訪れ、踊念仏をおこなった。そのあと落合新善光寺へ向かった。ここは大井光長が建立した寺で、光長は阿弥陀如来三尊仏もつくらせたと伝える。

諏訪信仰の広がり



法然上人絵伝　巻26（京都市　知恩院蔵）国宝

5代執権北条時頼を看取る蓮仏（諏訪盛重、中央の白衣剃髪の人物）。諏訪氏は、上社大祝の家系で、盛重は大祝退位後、北条氏と密接な関わりを持つと伝えられている。盛重は、1236年（嘉禎2）以降出家して蓮仏と名乗る。

古代薙鎌
（小谷村　大宮諏訪神社蔵）
小谷村指定有形文化財

薙鎌信仰
諏訪大社は分社をおこなうさいに御霊代として、薙鎌を分与している。長野県下はもとより、日本全国の諏訪神社に薙鎌が存在している。

薙鎌所在地（「諏訪市史」上巻より）

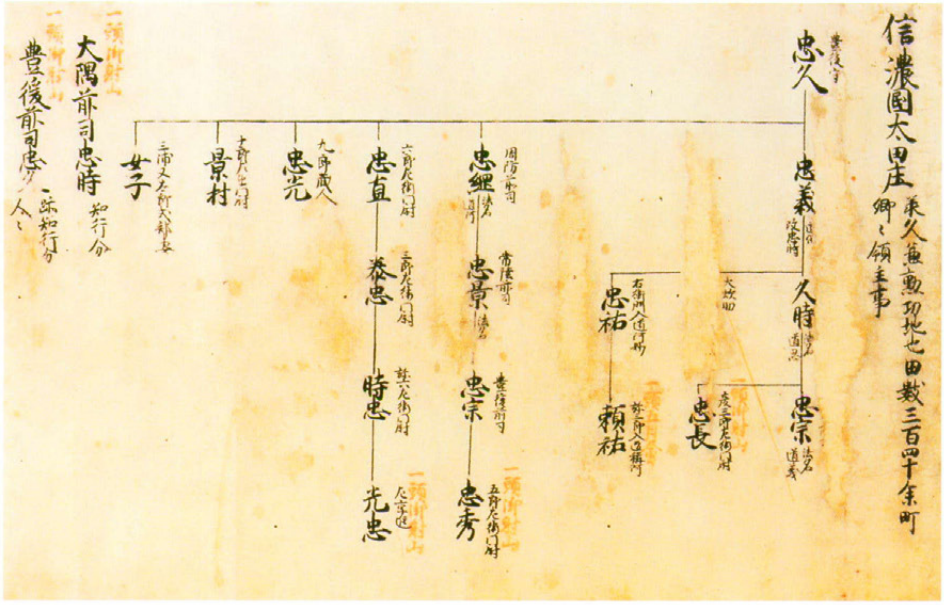
◆諏訪信仰の始まり

古代より諏訪社の祭神は、竜あるいは大蛇の姿だと考えられ、水の神、農業の神として、人びとから厚く信仰されていました。諏訪信仰がなぜ全国的な広がりをみせたのか、古くは大和朝廷の蝦夷征伐にさかのぼります。東北の蝦夷に手を焼いていた大和朝廷は、坂上田村麻呂を向かわせました。そのさい、田村麻呂が東国一の軍神である諏訪神社に祈願したという話が伝わっています。

◆鎌倉幕府と諏訪大社

もっとも諏訪信仰が全国的に広がったのは、鎌倉時代のことです。鎌倉幕府を開いた源頼朝と北条氏は諏訪神社との結びつきを大切にしました。

頼朝は、御家人らに諏訪大祝の命令を諏訪明神のお告げとしてあざむくことのないようにと命じました。



信濃国太田荘相伝系図　（東京大学史料編纂所蔵）

九州南部を支配した島津氏初代の忠久は、承久の乱での勲功により信濃国太田荘の地頭職を任じられている。系図中には「一頭御射山」などの朱書きがなされており、以後島津一門が歴代、諏訪大社の御射山祭の頭役を勤めたことがわかる。その後島津氏は九州に諏訪社を勧請している。

鎌倉幕府は、殺生禁断のために守護地頭に鷹狩り禁止令を発布しましたが、神に捧げるための御贄狩りだけは例外としました。このため、諸国の御家人らは諏訪社を勧請して御贄狩りと称して鷹狩りを続けました。

◆戦国大名と諏訪信仰

戦国時代になると、諏訪信仰はさらに広がりを見せるようになりました。各地の武士は、軍神である諏訪神社を勧請して、戦さに勝つことを祈願しました。

川中島で戦った上杉謙信と武田信玄も諏訪神社を崇拝していました。なかでも信濃の守護になった信玄は、諏訪神社の祭礼を再興し、諏訪神社を通じて信濃や分国を支配していこうとしました。

その後、武田勝頼と戦った織田信長は、1582年（天正10）、諏訪大社上社を焼き討ちすることになります。　（黒岩龍也）

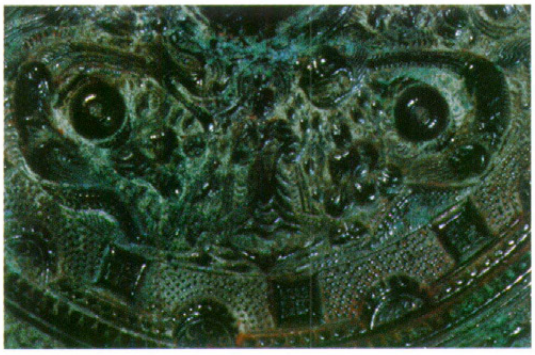
440年ぶりに復活した諏訪大社下社流鏑馬奉納の儀

鎌倉時代に、御射山祭において全国の武士たちが原山・旧御射山に集まって、盛んに武技を演じ、大変なにぎわいを見せていたと伝えられている。

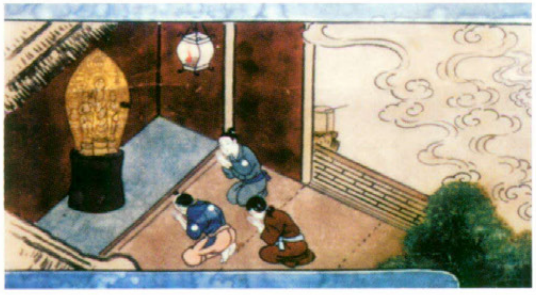
信玄十一軸　（諏訪大社上社蔵）

武田信玄が諏訪社の神事再興を命じた文書

氏寺から国家の寺院へ



画文帯四仏四獣鏡
（開善寺蔵　飯田市教育委員会提供）
飯田市御猿堂古墳　重要文化財



善光寺如来を安置する本田善光
（「善光寺如来縁起」 当館蔵）

古瓦 （当館蔵） 千曲市屋代遺跡群

◆古墳時代の仏教

日本には538年に百済から仏教が伝来したとされます（仏教公伝『上宮聖徳法王帝説』など）。しかし、公伝以外にも仏教が伝わってきたようで、6世紀の飯田市御猿堂古墳の鏡には、仏の像が描かれています。人びとが仏教の教えをどの程度理解していたかは別にして、仏教やその文化に触れることはあったようです。

◆寺院の建立

寺院というと、瓦葺の壮大な建物がイメージされますが、仏教が伝わってきた当時は、必ずしもそうでは無かったようです。

『日本書紀』によると、豪族の蘇我稲目が自分の居館に仏像を安置し、寺院としたとされます。古代の文献ではありませんが、『善光寺如来縁起』にも、当初本田善光は自分の家に仏像を安置し、おまつりしたとされ、仏教伝来当時、居館を寺院とすることがあったことを伝えているのかもしれません。

◆古墳から寺院へ

7世紀後半以降、古墳がつくられなくなり、各地の豪族たちは、瓦葺の建物を寺院として建立するようになりました。古い瓦が出土することから安曇野市明科廃寺のほか、長野市石川、千曲市雨宮などは、豪族の氏寺ではないかとも推定されています。古墳を造らなくなった豪族

信濃国分寺模型　（上田市教育委員会蔵）

たちが先祖のまつりを寺院でおこなうようになったのでしょう。

◆政治と宗教

飛鳥時代（７世紀）には、科野国にも地域の行政の単位として評（のちの郡）がおかれました。千曲市屋代遺跡群の木簡からは、当時の地域政治や行政のようす、遺跡周辺がその拠点だったことがわかります。

その屋代遺跡群に隣接して、雨宮廃寺があります。寺院には死者を弔う性格がありますが、政治がうまく行くようにとも祈ったのでしょう。当時は、政治と宗教は密接な関係がありました。

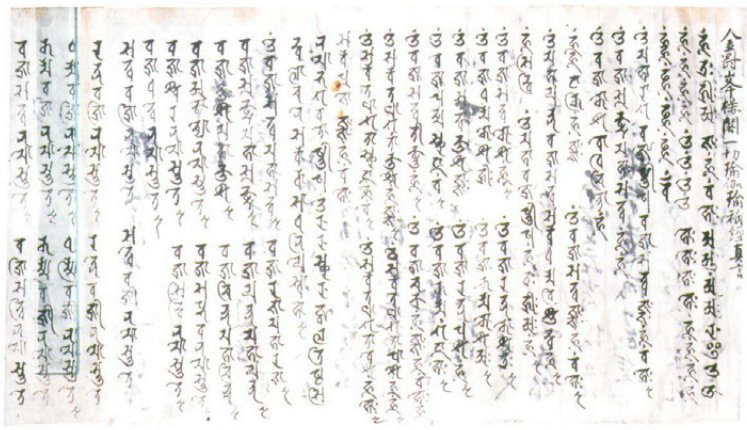
各郡を示す瓦の文字　（上田市教育委員会蔵）
「更」は更級郡、「伊」は伊那郡の略。いずれも信濃国分寺跡周辺で出土。

◆国分寺の創建

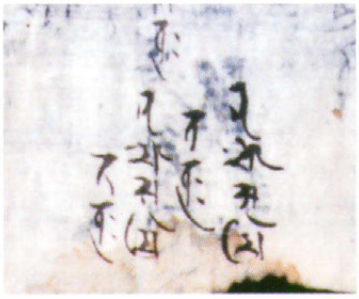
飛鳥時代の寺院は、地域の豪族のための寺院（氏寺）の性格が強かったようです。奈良時代になって、各地に国府などの役所（官衙）が整備されたように、中央と地方という関係が強化されましたが、こうした中央集権的な政治の動きは、寺院にもみられます。

聖武天皇は、741年（天平13）に全国に国分寺と国分尼寺を建立する命令を出します。全国的に国家の寺院がつくられました。さらに各国では、管轄下の郡にこれらの造営を手伝うことを命じたと考えられます。　（川崎　保）

仏像に込めた願い



納入された経典　（佐久市　長念寺蔵）
手紙を再利用し、特殊な仏教文字（梵字）で書きつらねた経文を阿弥陀如来に納入した。



仏を示す文字　（佐久市　長念寺蔵）
手紙の書き手のサインの裏には釈迦如来を示す仏教文字（梵字）が書かれていた。

阿弥陀如来立像　（佐久市　長念寺蔵）
大和国（奈良県）で造られた仏像で鎌倉時代東山道を経て信濃国へもたらされた。

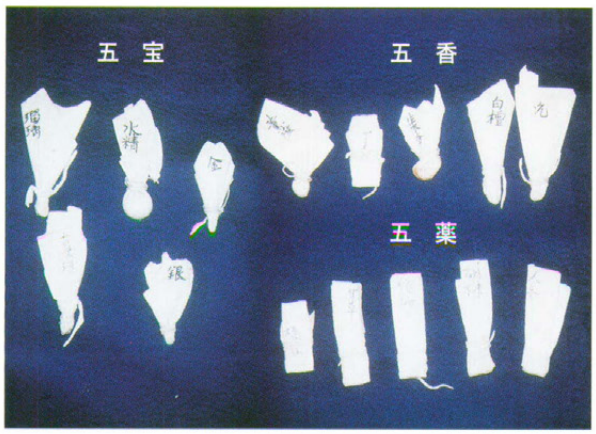
◆仏像のなかにお経を入れる

長野県内にはたくさんの仏像があります。それぞれの仏像には古い歴史があり、それぞれ美術的にすぐれています。

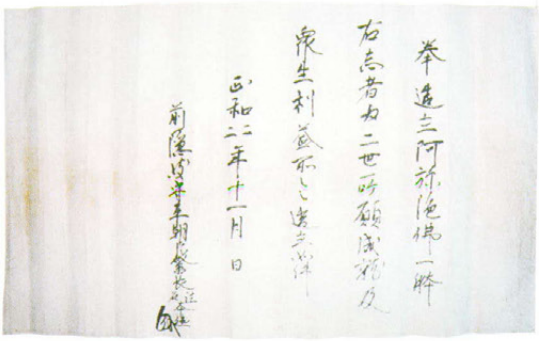
仏像が地域の人たちの祈りや願いを込めた「信仰の対象」であり続けてきたということはいうまでもありません。

佐久市御馬寄の長念寺には鎌倉時代の阿弥陀如来像があります。阿弥陀如来とは、人間が亡くなったあと極楽という清らかな地へ導いてくれる仏とされ、浄土信仰が民間に広まった鎌倉時代以降人びとから敬われてきました。

長念寺のこの仏像は、極楽へいざなってくれる阿弥陀様らしく、やさしい顔とスマートな体をした美しいものです。おもしろいことにこの仏像のおなかのなかには30枚もの鎌倉時代初めに写された経典が納められていました。経典は一度使われた書状の裏を用いて書かれており、



仏像のなかに納められた品
（上田市　霊泉寺蔵　写真　長野市立博物館提供）
五香は白檀・薫陸・沈・丁香・生木香、五宝は金・銀・水晶・瑠璃・真珠。五薬は朝鮮人参・甘草・縮砂・橘皮・胡椒をいう。



願文　（上田市　霊泉寺蔵）
和田繁長が二世（現在と未来）の幸せをいのるため阿弥陀如来をつくったと記されている。

書状の書き手を弔う梵字も記されていました。阿弥陀如来による救いを求めた鎌倉時代の人びとの思いがうかがい知れます。

◆阿弥陀様の腹から舶来品みつかる

1315年（正和４）、信濃の武士和田繁長は、一族の寺の霊泉寺（上田市）の阿弥陀如来をつくりました。このとき繁長は「現世と来世が幸せになり、我われに利益がありますよう阿弥陀如来をお造りします」という文章を書き、阿弥陀如来のなかに大切に納めました。同時に仏舎利（釈迦の骨）や経典、五宝（金銀など宝石）・五香（東南アジア産の５種類の香料）など中国からの貴重な舶来品も仏像にいれて極楽往生を祈りました。

このように中世の人びとは、文字どおり仏像のなかに願いや祈りを込めてあつく仏様を敬ったのです。

（村石正行）

阿弥陀如来坐像　（上田市　霊泉寺蔵）　県宝
和田氏が1315年につくった仏像で、内部にさまざまな品を納めて祈ったもの。

信濃出身の高僧

無本覚心像　（佐久市　安養寺蔵）
信濃出身の鎌倉時代の名僧。宋（中国）から尺八や味噌を初めて日本にもたらした人ともいわれている。

高野山金剛峰寺金堂　（高野町提供）
空海が開いた真言宗の総本山である高野山の金堂。無本覚心ら鎌倉新仏教の禅僧たちは、旧仏教も学んだうえで、新しい仏教思想を身につけていった。

安養寺
無本覚心が開山した佐久市の安養寺。後深草上皇の勅願により創建されたと伝えられ、信州味噌の発祥の地ともいわれている。

◆宋にも渡った信濃出身の禅僧

禅宗、とくに臨済宗の寺院は鎌倉幕府が位をあたえ、厚く保護しました（五山十刹制度）。こうして禅宗は全国に広がりました。信濃でも多くの寺院が建立され、国内外で修行や学問を積んだ禅僧たちもたくさん育っていきました。

たとえば、筑摩郡神林（松本市）出身の無本覚心（法燈国師、1207～98）は、戸隠（長野市）で修行していましたが、29歳のとき奈良の東大寺で受戒（正式の僧侶となる儀式を受ける）し、ついで和歌山県の高野山でも学びました。京都や山梨でも高僧の下で学問を修めたあと、宋（中国）に留学し、5年間にわたって学問や修業を重ねました。

興国寺（和歌山県由良町提供）
無本覚心が開山した和歌山県の西方寺（興国寺）、十刹のひとつで天皇や上皇たちもこの寺を大切にした。

関山慧玄像
（中野市　霊閑寺蔵　北信ローカル提供）
信濃の高梨氏の出身。建長寺で出家し、やがて妙心寺を興した。妙心寺は臨済宗のお寺の過半数を占める大本山となった。

帰国してからは、高野山で僧侶たちの首座（最上位の席）をつとめたり、十刹のひとつである和歌山県の興国寺や故郷信州に安養寺（佐久市）を開山したりしました。

◆信濃出身の高僧たちの活躍

このほかにも、無関普門（1212～91）、規庵祖円（1261～1313）、関山慧玄（1277～1360）らの多くの禅僧が信濃の地から育っていきました。これらの僧侶たちは、"信州の学海"といわれた塩田（上田市）や鎌倉、京都など全国各地の寺院で学問や修行に励み実力をつけていきました。

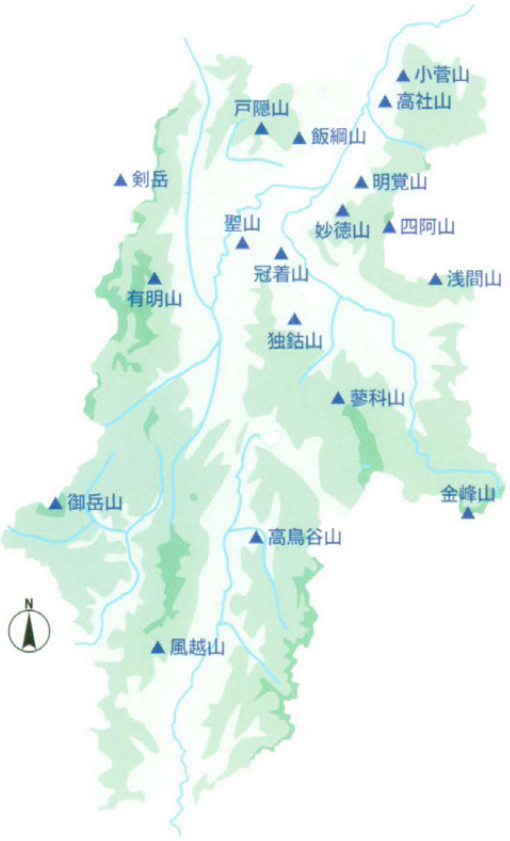
こうした宋（中国）に留学した僧侶たちなどの努力により、日本の仏教の国際的な水準が高まるとともに、武士をはじめとして多くの人びとへ禅宗が拡がっていったのです。　（唐澤　敏）

無関普門像（南禅寺蔵　京都国立博物館提供）
保科（長野市若穂）にうまれ、塩田（上田市）などでも学んだ。宋に留学して日本からの留学僧のリーダーもつとめ、帰国してからは京都に南禅寺（五山の上）などを興した。

神仏習合と修験道

仁科神明宮全景　（大町市文化センター提供）　国宝

仁科神明宮御正体
（大町市　仁科神明宮蔵）　重要文化財
銅製の円板に仏像（大日如来）を取り付けたもの。鎌倉時代の作。



おもな県内修験道遺跡関係地図

◆神社に仏　寺院に神

仏教が伝来して以降、時代をへるごとに、土着の神と仏が一心同体であるとする考えが広まるようになりました。これは人びとを救済するために、仏が神となってこの世に姿をあらわしたというものです（本地垂迹説）。

たとえば神道の天照大神と仏教の大日如来、大国主命とさまざまな功徳をもたらす大黒天を同体として崇めました。また神社のかたわらに「神宮寺」等の仏教関係施設が建てられるようにもなりました。伝統的な神への信仰と仏教信仰を、対立ではなくおたがい補いあうかたちで人びとは受けいれてきました。

◆修験の山　信仰の山　山岳信仰

古来から人びとは山と深く関わって生活し、崇めてきました。山とつながる修

霊峰戸隠連峰（長野市　戸隠神社提供）

御正体（中野市教育委員会蔵）　平安時代末

中野市建応寺跡からは平安時代末の神像や阿弥陀如来像などが発掘された。当時修験の道場だったとされる。

験道は神道や仏教などと習合した日本独特の信仰です。山岳で修行をして霊験を得た修験者（僧）は「山伏」ともいわれ、きびしい修行により超自然的な力をもつと信じられ、神仏に祈り病気や災いをはらうなど人びとのくらしにかかわってきました。

戸隠は平安時代に書かれた『梁塵秘抄』に修験道場として名前があり、全国に知られていました。山頂近くの岩場や洞窟などに諸仏や神がみを安置し修行をしたのです。長野県内の山やまには古代・中世の山岳信仰伝承が残り、修験関係の遺跡・遺物が数多く発見されています。

豊かな自然に育まれてきた修行の山も現代ではたくさんの人びとが親しむ山となり、日の出を「ご来光（来迎）」と仰ぎ敬虔な気持ちに浸ります。（下崎誠一）

錫杖頭（富山県立山博物館蔵）　重要文化財

修験者が持ち歩いた杖。前人未踏といわれた剣岳頂上で1907年（明治40）に発見された。平安時代初期の作。

古代のさまざまな祈り

泉のまつり　（当館蔵）　千曲市屋代遺跡群
泉から水を引く導水の樋。5世紀。

まつりの道具
（当館蔵）　千曲市屋代遺跡群
人間、馬や蛇をかたどったものもある。7世紀。

墨書土器　（当館蔵）　長野市篠ノ井遺跡群
まじないの文字か。平安時代。

「佛」と書かれた土師器
（佐久市教育委員会蔵）佐久市聖原遺跡
平安時代。

◆神聖な泉ー水辺のまつり

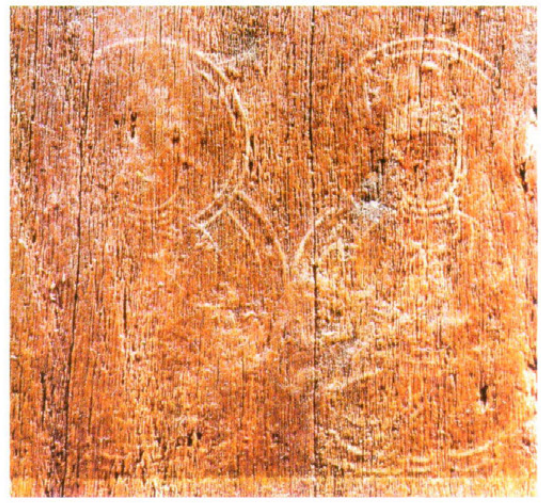
古代の人びとは泉を神聖なものとしてあがめました。泉は水田には欠かせないものなので大切にされ、また汲めども尽きぬ水は神秘的なものだったでしょう。

千曲市屋代遺跡群からは、湧きでた水を流す施設が発掘されました。遺跡周辺では、長い間泉にかかわるまつりが行われました。

◆まじないの文字

平安時代になると、人、場所、建物などの名前以外の文字が土器に、書かれるようになります。くわしい意味がわかりませんが、まじないや信仰にかかわるものと考えられています。

塼仏（せんぶつ）（当館蔵）長野市篠ノ井（しのの い）遺跡群
塼仏は粘土を型に押しつけて焼いたもの。



仏画
（長野県埋蔵文化財センター提供）千曲市社宮司（しゃぐうじ）遺跡
六角木幢の幢身に描かれていた。阿弥陀如来（あみだにょらい）と推定されている。

◆「ムラの仏教」－草堂仏教－

一般の人びとが住んだ古代のムラの中にも仏教の影響をみることができます。寺院中心の伽藍（がらん）仏教に対して、これらを草堂（そうどう）仏教と呼ぶこともあります。

ムラの仏教のようすを示すものの一つが塼仏（せんぶつ）です。信濃などでは、塼仏は瓦塔（がとう）と呼ばれる焼物の塔の中に納められたとも考えられ、当時の人びとがムラの中で信仰の対象としていたもののようです。

千曲市社宮司（しゃぐうじ）遺跡からは、仏が描かれた六角木幢（ろっかくもくどう）が出土しています。これらは人びとが極楽往生（ごくらくおうじょう）を願っていた様子を知るうえで、きわめて貴重な資料です。

（川崎　保）

六角木幢（ろっかくもくどう）
（長野県埋蔵文化財センター提供）　千曲市社宮司（しゃぐうじ）遺跡
11世紀末～12世紀初頭。平安時代末の木幢の出土例はきわめて貴重。

戦国武将の祈り

千曲河畔から望む飯綱山
（近藤克則氏撮影）

一の鳥居
現在でも多くの登山者がこの鳥居をくぐって霊山、飯綱山の山頂を目指している。

諏訪明神旗（塩山市　雲峰寺蔵）と
諏訪法性兜（甲府駅前銅像）
武田騎馬隊は、「風林火山」の軍旗とともに諏訪明神旗をかかげて、向かうところ敵なしとまでいわれた。

◆武士たちも死を恐れていた

戦国時代の武将たちは、毎日のように命の危険にさらされ、みな命知らずのように思われているかもしれません。

しかし、常に死と隣り合わせであったからこそ、彼らは神仏にすがり、心の安定を強く求めていました。

彼らは、自分の領地のなかに善光寺をあらたに作ったり、諏訪社の分社を置くなどしたため、善光寺や諏訪社の信仰なども各地に広まっていったのです。

また、戦国武将たちは、スサノオノミコト・ヤマトタケルノミコト・坂上田村麻呂・毘沙門天・不動明王・大威徳明王・摩利支天などさまざまな神や仏を軍神としてあがめ、たてまつりました。

上杉謙信　兜前立て　（新潟県　常安寺蔵）

一説にはこの飯綱明神はインドから仏教とともに伝来した荼吉尼天が原体ともいわれている。

上杉謙信「毘」の軍旗　（山形県　上杉神社蔵）

謙信は毘沙門天を守本尊として、出陣前にかならず祈祷し、みずからの旗印にするなど熱心に信仰した。

◆信玄も謙信も信仰した飯縄権現

現在は市民の山として親しまれている飯綱山。この山は平安時代から修験道の山として知られ、この山頂に祀られた飯縄権現は、軍神として戦国時代の武将たちにとくに信仰を集めました。

この飯縄権現は、不動明王の仮の姿で、白狐に乗るカラス天狗の姿をしているといわれ、「飯縄の法」という魔術を授けるという信仰が古くからあります。上杉謙信はこの飯縄権現の姿を兜の前立てにして、閲兵や儀式のときに着用したと伝えられています。

武田信玄も躑躅ヶ崎館に飯縄権現像を安置して熱心に信仰しました。

（成竹精一）

飯縄権現像図　（和田守氏蔵）

善光寺信仰の広まり

「出開帳」と善光寺道　―庶民の寺・善光寺へのお参り―

「御師の笈」
（須坂市　光明寺（天野義光）蔵）　江戸時代
縦98.0×横62.0×奥行41.0cm
厨子内諸像　正面：阿弥陀如来
脇侍　左：勢至菩薩　右：観音菩薩
横左：法然上人　横右：善導大師
扉左：不動明王　扉右：欠落

（背面）

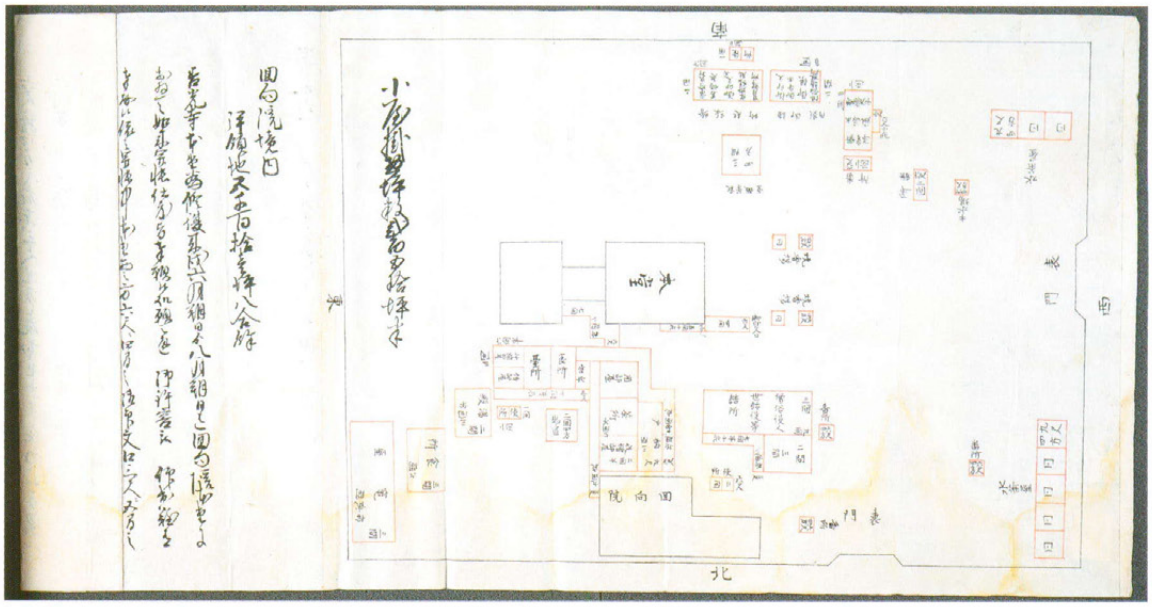
◆善光寺「出開帳」

善光寺以外での前立本尊の開帳を「出開帳」といいます。出開帳は江戸時代を通じて７回ありました。初回の1697年（元禄５）は、本堂再建のための勧進ですが、江戸の宿屋がこれを機会に増えたといわれるほどの盛況でした。江戸・京・大坂でおこなう三都開帳のほかに、諸国を巡る回国開帳がありました。

また善光寺を題材にした『黄表紙』（絵入り冊子）や小咄が多数つくられるなど、出開帳を通じて善光寺への信仰は、日本中へと広まっていったのです。

◆善光寺講と善光寺街道

善光寺の信仰を広めて歩く「御師」は、参詣の案内人、世話人であり、笈を背負って全国から信者を集めました。彼らは各地に一種の旅行団体「講」を組織し、女性や旅の初心者を含め、



回向院境内小屋掛願（部分）
（今井家文書　当館蔵）　1777（安永６）年３月
江戸深川回向院における出開帳（３回目）のさいに、寺社奉行へ提出した仮設施設の設営許可申請書。出開帳の目的は「善光寺本堂修復」である。収入は8,984両であった。

遠い道中を善光寺まで案内しました。

すべての宗派を受けいれ、女性の救済を説く善光寺には、多くの人びとがさまざまな街道を通って参拝しました。これらの道は「善光寺道（街道）」と呼ばれています。各地に善光寺への道標がたてられ参拝をうながしましたが、それらも善光寺信仰の広がりを物語っています。

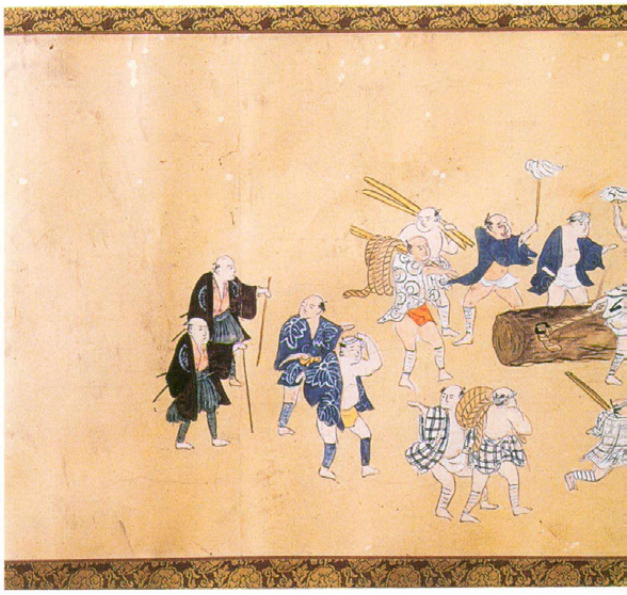
たとえば江戸と北陸方面を結ぶ主要路「北国街道」には、上田城下町西端に元禄５年の道標「右ぜんこうじ道」があり、そう呼ばれていたことがうかがえます。南信地方でも伊那街道と木曽方面への街道分岐点に「右善光寺道」の道標があり、南北の道が善光寺と結びついていたことを教えてくれます。遠くは岡山県津山市にも同様の道標が知られています。

（滝澤正幸）

ぜんこうじ道石標　（上田市常磐城（生塚））
右ぜんかうじ道　元禄五年壬申二月廿三日　生塚村

善光寺道石標　（伊那市坂下区）
左木曽路　念仏供養塔　右善光寺道

江戸時代の諏訪神社
―信濃一国の地頭による奉仕から諏訪一郡の人びとによる奉仕へ―



◆祭政の分離

戦国時代の武田氏、続く織田氏の支配下で、諏訪神社は信州各地にあった領地を失いました。また、大祝（おおほうり）や神官たちも、武士としての性格を奪われ、神職としてわずかな領地を与えられただけでした。

本能寺の変の後、諏訪一郡の支配を回復した諏訪頼忠（よりただ）は、長男頼水（よりみず）に領主家をつがせ、二男に上社大祝家を興（おこ）させ、祭政を完全に分けました。

◆高島藩（諏訪藩）による実質支配

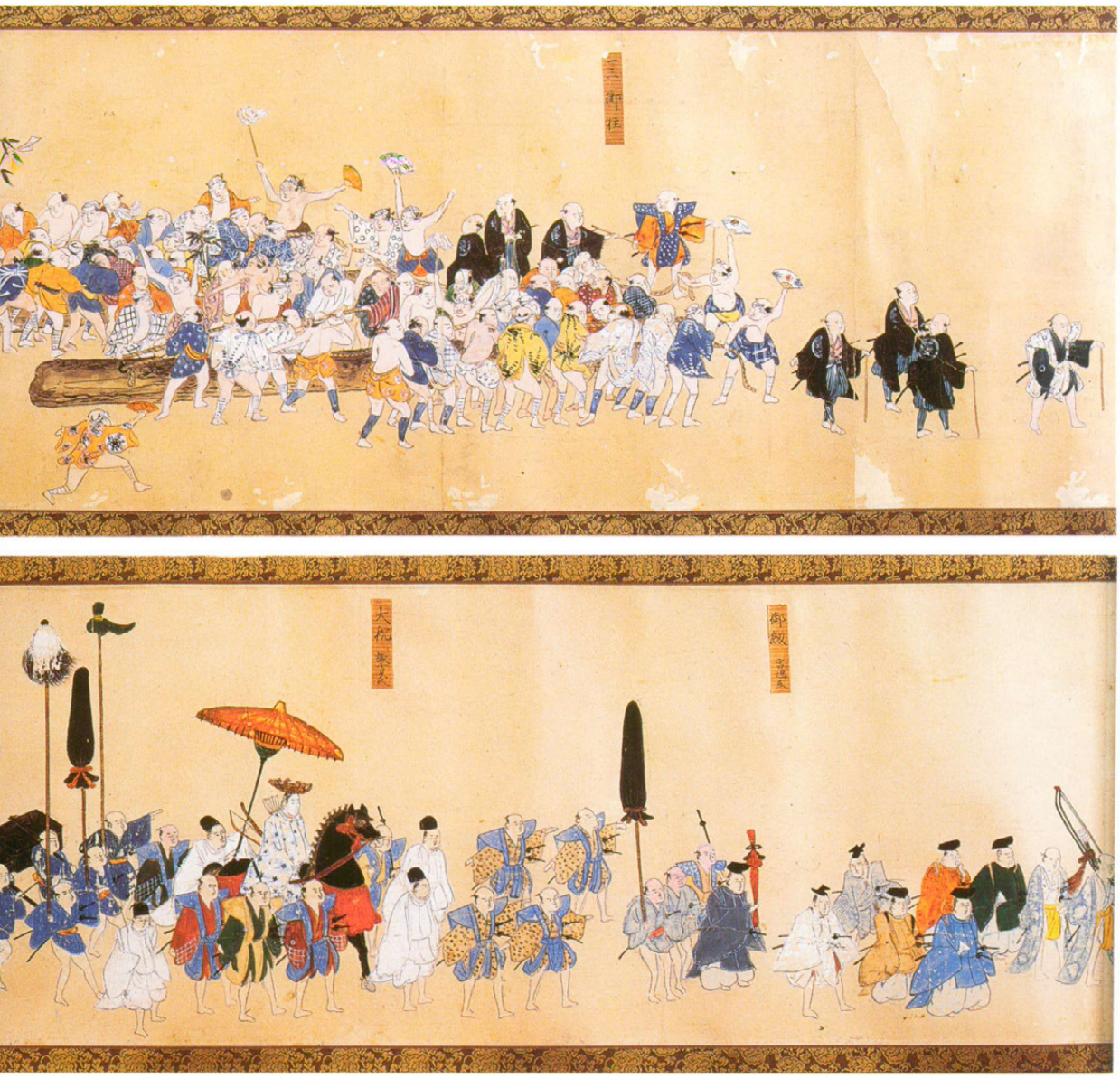
1590年（天正（てんしょう）18）から関東に移っていた諏訪頼水は、1601年（慶長（けいちょう）6）ふたたび諏訪一郡の領主になりました。

頼水は慶長7年に上社に1000石、翌年には下社に500石の土地を寄進（きしん）しました。これらの土地は、神社直轄分のほか、大祝・神官などに分け与えられていましたが、実際には高島藩（諏訪藩）が治めていました。大祝や神官は、高島藩から上級家臣並みの待遇（たいぐう）を受けていました。

◆高島藩による神事・祭礼の保護

諏訪頼水は、1614年（慶長19）諏訪社の神事（しんじ）（上社の酉（とり）の祭り、下社の御作田（みさくだ）祭り）をおこなうために御頭郷（おんとうごう）の制度を定めました。

これは、諏訪郡下の村むらを15組（石高の大きな一組は二組分とし、15組とした）に分け、各組が15年に一度、御頭（神事の金銭的・労力的負担を果たす当番）をするというものでした。御頭は村むらにとって大きな負担でした。そのため、高島藩は、御頭に当たった村むらに、神事が終わるまでは、神事のほかに人足（にんそく）



御柱絵巻　（岡谷市　小口哲男氏蔵）　1799（寛政11）年

江戸時代中期の御柱の曳航や御柱警護の高島藩士などのようすがわかる。

を出すことや宿場の助郷（宿場の輸送の手伝い）に出ることを免除していました。

寅と申の年におこなわれる御柱祭も、高島藩の御柱奉行が、諏訪郡下の村むらに分担を割りあて、手当を支給しました。高島藩家中・領民をあげて、御柱の年には冠婚葬祭をおこなわず、上社か下社のどちらかに属して奉仕しました。

（太田典孝）

檀那寺と鎮守社

位牌（高野弘太郎氏蔵）
江戸時代

仏壇（島田喜八氏蔵）
明治時代
先祖供養が庶民のあいだに広まると、庶民の家にも仏壇が置かれ位牌がまつられた。

舟形の墓石
17世紀中ころから戒名を刻んだ墓石が登場する。正面に家長夫婦の戒名が刻まれる。

箱形の墓石
18世紀なかばから増加する。板碑型と異なり四面に家族の戒名が刻まれる。家意識の高まりを示す。

◆檀那寺と檀家

江戸幕府は1612年（慶長17）の禁教令以来、キリスト教をきびしく禁止しました。すべての人をいずれかの寺院に登録し、キリスト教徒ではないことを証明させたのです。これを寺請制度といいます。

登録した寺を檀那寺、登録された家族を檀家とよびます。以後、檀那寺が檀家の葬儀や法事をとりおこなうようになりました。

先祖に感謝し、子孫繁栄を願う先祖供養は、それまで貴族や武士など一部の人がおこなっていました。江戸時代の中ごろに「家」の意識が庶民にも広まると、先祖供養は庶民の間にも高まりました。

こうして庶民の家にも仏壇が置かれ、先祖の位牌がまつられるようになりました。中野市の竹原や松川両地区では、17世紀なかばころから戒名を刻んだ墓石が立てられました。先祖を永久に供養するようになったのです。

治田神社　（千曲市桑原）

桑原村の「鎮守社」として、村人の信仰をあつめている。

◆鎮守社と氏子

鎮守社とは、村の土地や建物（とくに寺院）を守るために、まつられた神社のことです。江戸時代以前に、それぞれの地域を支配した領主は自分の領地を守るため、有名な神がみを本社から分けてもらい、まつりました。

江戸時代には、これらの神社は村を守る鎮守社（氏神様）として村ごとにまつられ、その村に住むすべての人びとは氏子となりました。鎮守社では農作物の生育を願う春まつり、収穫に感謝する秋まつりがおこなわれ、村びとの一体感を強めたのです。

幕府は、鎮守社と氏子の関係も人びとを支配するために利用しようとしました。すべての人びとを鎮守社の氏子にすることで、村から勝手に離れられないようにしたのです。

信仰の自由が保障された現在でも檀那寺と檀家、鎮守社と氏子の関係は残っています。　（酒井健次）

佐久間象山自筆幟　（桑原中区区民寄贈　当館蔵）

治田神社（千曲市桑原）に揮毫されたもの。春に豊作を願う「春祈鷹介福」（右）、秋に収穫を感謝する「秋報楽豊年」（左）と書かれる。

佐久間象山自筆幟　（桑原中区区民寄贈　当館蔵）

象山の落款

信仰の旅

大町市美麻青具の中村家に伝わる福俵

大町市美麻青具の中村家主屋正面外観

十王堂外観

◆信仰のかたち

江戸時代も後期になると、農村にも経済的な余裕が生まれ、村人の生活や文化活動を向上させようとする意識が高ります。ハレの日には農村舞台で歌舞伎や人形芝居などの「地芝居」を楽しむようになり、伊勢参りや善光寺参りなどの神社仏閣や名所旧跡への観光地巡りと信仰の旅に出かけるようになりました。

大町市美麻青具の中村家は、松本藩の支配下で村役人を代だいつとめました。住まいは白馬や大町方面から善光寺へ人や物が動く街道の要所にあります。1769年（明和６）に５代目武左衛門が四国・秩父・坂東の札所巡り達成記念に供養塔を建立しました。日常生活のなかに信仰心を育み、神仏への信仰をかたちとしたのです。

福俵に納められたお札の購入先分布図

北は塩釜六社神社（山形県）、西は出雲大社（島根県）、南は四国の金毘羅宮（香川県）のものまである。

◆買い求めたお札

中村家には数多くのお札が残されています。お札は、日本各地の神社仏閣で参詣のおりに買い求めたものです。県内のものは、武水別神社（千曲市八幡）をはじめ、善光寺に戸隠神社や諏訪神社などがあります。県外では、豊川稲荷神社（愛知県）、伊勢神宮（三重県）、西宮神社（兵庫県）などです。ほかに伊勢講・秋葉講など講を立て代参したお札もありました。ここには笈櫃も残されています。家人は、この笈櫃を背負って信仰の旅に出掛け、買い求めたお札類を納め入れて家路についたのです。

帰宅後、お守り札などは、屋内の神棚に祀られたあと、福俵に納め、ちゃのまの屋根裏材へ結わえ続けたのです。福俵は六つで、どれも俵一杯に詰められていました。県外でもっとも多いお札は、伊勢神宮のものでした。　（伊藤 友久）

笈櫃

櫃（箱）の中には数珠やお札、西国三十三番札所の案内などが入っていたという。笈櫃は薄板に渋紙を貼り、背負い紐やそれを掛ける金具がついていた。

町場の祈り

松本市初市「市神祭之図」（宮澤辰彦氏蔵　松本市文書館提供）

松代中町の市太神　（長野市松代町）

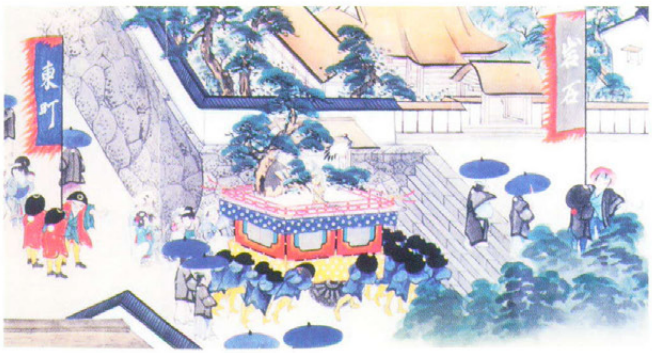
宮村大明神
（「善光寺道名所図会」1849年刊）　松本市深志神社

◆市神・初市（あめ市）

越後の上杉謙信が敵将甲斐の武田信玄に塩を贈ったという故事に由来する松本の飴市（初市）は、江戸時代の初期から続く伝統的な行事です。このまつりでは市神が祀られ、江戸時代に書かれた『善光寺道名所図会』にも見ることができます。市神は商売繁盛の神様として商人に信仰されています。

江戸時代には各地に市が立ちました。1か月に開かれる回数により五日市・六日市・十日市と呼ばれ、市が開かれるところにはやはり市神様が祀られています。

また、江戸時代の中ごろから、商売繁盛や現世利益を願い、お稲荷さんの稲荷神社や西宮神社（兵庫県西宮市）に祀る恵比須神など、さまざまな神様も勧請されました。



善光寺祭礼図巻　（真田宝物館蔵）
善光寺八町のほか江戸時代後期には後町や権堂村なども加わった。

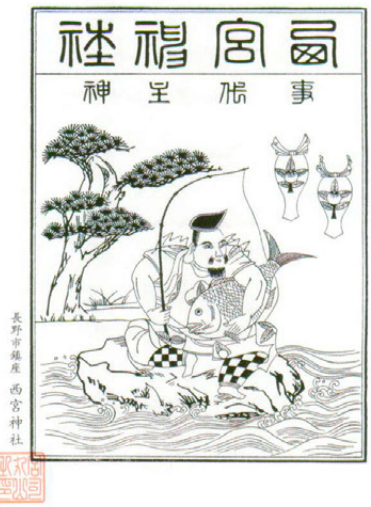
◆祇園祭・恵比須講

善光寺の祇園祭礼は、善光寺八町の最大のまつりでした。祇園祭は牛頭天王を祀る京都の八坂神社のまつりが広がったものといわれます。疫病や災害除けのまつりからさらに、山車などがつくられ、繁栄や華美を競うようになりました。

冬が近づくと町では恵比須講が開かれ、大安売りがおこなわれます。盛んになるのは明治以降です。恵比須様と大黒様は海や漁業の神様であるとともに商売繁盛の神様でもあります。

◆火伏せの秋葉神社

城下町や宿場町は家と家とが軒を連ねているため、いったん火事が起きると燃え広がり大きな火事になりかねません。防火の願いから火伏せの神様として、遠州（静岡県）の秋葉神社を祀るようになりました。秋葉神社に向かう遠山谷（飯田市）の街道は「秋葉道」とも呼ばれました。　（大橋昌人）



西宮神社の御神札　（長野市岩石町）

宿の出入り口に祀られている秋葉神社
（長野市若穂町川田）

村の祈り

地蔵堂の内部　（長野市立博物館提供）　長野市松代町岩野
村人や周辺の村むらの寄付金でつくられた観音像が祀られている。

大きな岩の上に並ぶ馬頭観音　（上水内郡飯綱町芋川）
農作業や荷物の運搬を手助けしてくれた馬が亡くなると、石碑（馬頭観音）を建てて供養することもあった。

◆村の祈り

近世の村むらでは、さまざまな神仏が祀られ、生活の無事や農作物の豊作を願いました。

1697年（元禄10）の松代藩『山里村々堂宮書上写』によれば、寺とは認められていない小規模なお堂や、お宮が藩内の221か村（現在の長野市、千曲市周辺の村むら）に1745か所以上もありました。

こうしたお堂やお宮は、そこに住む人びとにとって集会所であったり、さまざまな願いを聞いてくれたりする心のよりどころとして大切にされてきました。

また村には、神仏を祀ったり、参詣したりするために組織された念仏講や庚申講、秋葉講、三峯講などもありました。

金峰山

秋山村（南佐久郡川上村）の1770年（明和７）『御用掛並村入用帳』には、閏６月１日「惣村中・寺社共」に「旱魃二付、金峯山江雨乞二登山」と記録されている。

◆雨乞い

村の人びとにとって、田畑の作物が豊かに実ることはなによりの願いでした。雨が降らず作物の成長に影響が出てくると、村中の人びとが地域のお宮に集まって雨乞いの祈願をしました。それでも効果がないと、石仏を川に沈めたり、近くの山に登り太鼓を鳴らしたり、大火をたいて雨の降るのを祈りました。金峰山（2595m）のような高山の山頂で雨乞いをする村もありました。

黒姫山の西南麓にある種池は、雨乞いの代表的な場所の一つです。池の水を汲み、戸隠神社の奥社等で祈祷のあと、水桶を持ち帰って、田畑や池に注ぐと雨が降ると信じられてきました。今でも、ときおり降雨や降雪を祈って種池の水が持ち帰られています。　（小柳義男）

種池　周囲700mたらずの小さな池です。

戸隠神社の水桶　（戸隠神社蔵）

廃仏毀釈

興福寺五重塔

興福寺の僧侶は公卿の子弟が大部分で、すべて還俗して、春日神社の神職となった。多くの経巻も散逸し、唐招提寺に移築された伽藍もあった。五重の塔は25円で落札された。その値段は、解体すれば費用がかかるので火をかけて焼き、残った金属を見積もった値段であった。買い主は金具をとるため、放火しようとしたが、付近住民が火災のおそれがあると反対したために中止された。

島地黙雷

（飯山市　真宗寺提供）

外遊中の本願寺僧侶、島地黙雷は、政教一致の政策を批判し、政府に信教の自由・布教の自由の意見書を提出した。彼は長州出身であるため、木戸孝允、伊藤博文らと懇意であり、その意見はしばしば受け入れられた。また仏教の衰微によって、キリスト教の興隆を恐れた政府は、再び仏教寺院の保護にのりだした。

◆神仏分離令

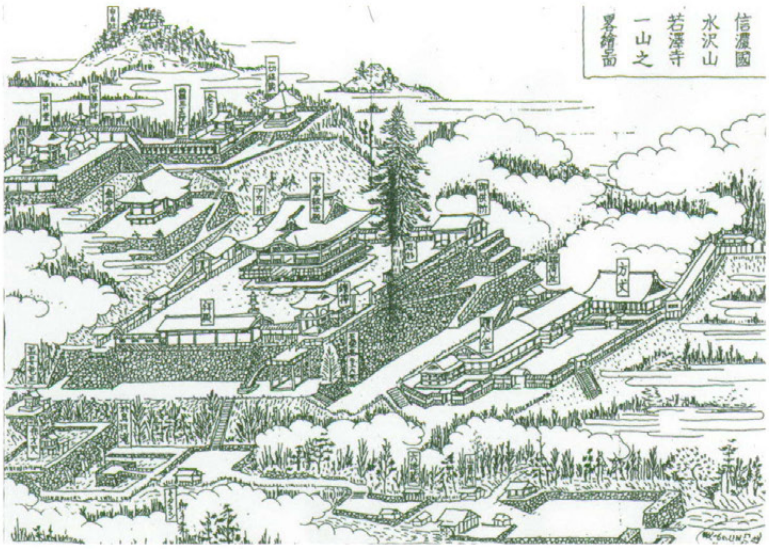
明治新政府は、天皇の祖先を祭っている伊勢神宮を頂点とする神道を国教化して、祭政一致政治で全国を統一しようとしました。慶応４年（明治元年は９月８日から）３月28日、神仏分離令が発布されました。日本には平安時代から神仏習合を伝統とした宗派が多くありました。これによって仏像を神体とすること・神社に仏像・仏具を置くこと、神社境内の神宮寺や、寺院内の鎮守神などが禁止されました。

◆廃仏毀釈運動

この命令が出ると、神官たちは明治政府の力を背景に、神仏分離だけでなく、廃仏毀釈運動を展開しました。それはたちまち全国的に広まり、多くの堂塔伽藍や経巻、仏像仏画、その他の貴重な美術品が失われました。

焼かれる経巻

絵には、神官が命令して村役人たちに経巻や仏具を焼かせ左下に困泣する僧侶を描いている。このようにして貴重な文化財の数々が失われた。



江戸時代の若沢寺

（「若沢寺一山総絵図」 個人蔵　波田町教育委員会提供）

「信濃日光」といわれて有名だった真言宗若沢寺も廃仏毀釈にあい、廃寺となった。こうして多くの貴重な文化財が失われた。

若沢寺の廃寺跡

うっそうとした山林の中に当時をしのばせる石垣が残っている。

◆南信の廃仏毀釈

長野県で最初に廃仏毀釈の動きがあったのは、1868年(慶応４）３月のことで、伊奈郡の数か村で観音・馬頭観世音・地蔵などが何者かによって残らず破壊されました。

神仏分離令を実行することに、とまどいを感じていた藩が多く、まして堂塔伽藍の破壊には抵抗があったようです。諏訪神社内の神宮寺が取り壊されたのは1868年（明治元）のことでした。

◆松本藩の廃仏毀釈

松本藩で廃仏毀釈が行われたのは、1870年（明治３）になってからでしたが、全国的にみても、もっとも徹底して廃仏を実行した藩の一つでした。

藩内164か寺のうち、76%になる124か寺の僧侶を還俗・帰農させ、廃寺にしました。しかし反対を貫いて、廃寺を免れた寺もありました。やがて廃藩置県がおこなわれたため、この運動はうやむやのうちに終わっていきました。（本多 得爾）

田村堂

（波田町教育委員会提供）重要文化財

坂上田村麻呂をまつったのでこの名がある。室町時代の作と伝えられ、若沢寺絵図を見ると、左上最上段にこの堂が描かれている。

上諏訪社内の神宮寺

（個人蔵　諏訪市博物館提供・二扇の絵を連結）

上諏訪神社の図。中央上の方に神宮寺の塔が見える。神宮寺の堂塔伽藍は明治元年に取り壊された。寺側と取り壊し職人や村人などは、反対したが、観察使がやってきて取り壊しを厳命し、神職が羽織はかまで手伝ったという。

キリスト教の広がり

キリスト教禁止の高札（上田市立博物館蔵）

「きりしたん宗門御制禁」と書かれている明治５年ころの高札。

明治新政府は、1868年（慶応４）３月、民衆にたいし５か条の心得を掲示したが、徳川幕府の方針を継続するものであった。

日本基督公会上田教会（上田市）

旧上田藩士らが中心になって設立した長野県ではもっとも早いプロテスタント（新教）の教会で、全国でも６番目の設立であった（建物は当時のものではない）。

上田保姆伝習所（「上田市誌」から転載）

1904年（明治37）カナダ人女性宣教師の住宅として建てられたこの建物は、1919年（大正８）まで、上田保姆伝習所の教室としても使用された。歴代の宣教師達は宣教活動とともに幼児教育にも力を注ぎ、梅花幼稚園を開設して幼稚園教育を実践し、幼稚園教諭の育成に努めた。（現在、建物は「旧宣教師館」として移転保存されている。）

◆キリスト教の解禁

明治新政府は当初、キリスト教を禁止し、御一新に期待した民衆を落胆させました。政府派遣の欧米視察団が諸外国でキリスト教迫害に対する抗議を受けたため、帰国した1873年（明治６）に禁止は解かれました。

その後キリスト教は、日曜学校、聖書研究会、幼稚園を組織したり、クリスマスを祝う儀式、幻灯・オルガンを使っての布教や、禁酒・禁煙の社会運動など、幅広い布教活動を展開し、青年層を中心に信者をしだいに増やしていきました。

布教活動にはさまざまな圧迫がありましたが、明治20年代になると一神教のキリスト教は、天皇崇拝や国家をなによりも優先する考えと衝突し、日露戦争前には戦争に反対する信者もありました。

研成義塾（けんせいぎじゅく）（井口喜源治記念館提供）

相馬愛蔵らが結成した東穂高禁酒会が始めた夜学会が発展して、1898年（明治31）に設立された中等教育機関である。
ここでは井口喜源治により、キリスト教精神による人格形成の実践教育がおこなわれ、幾多の人材を送りだした。
生徒ではないが、荻原碌山も喜源治を慕ってここに通った一人である。のちに、彼は中村屋の相馬愛蔵夫妻の支援のもと彫刻に打ちこむが、喜源治は生涯の師であった。

井口喜源治（いぐちきげんじ）（1870～1938）
（井口喜源治記念館提供）

旧制松本中学校在学中に、英語教師であったアメリカ人宣教師の影響によりキリスト教信者となった。
喜源治は、義塾創立から昭和13年の廃校時まで、裁縫（さいほう）以外の教科を一人で担当した。

◆長野県のキリスト教

長野県ではまず、上田地方にキリスト教を受けいれる動きがあり、1876年（明治９）に教会が創設されました。その後、松本地方でも住民による伝道活動がおこなわれて教会が設けられ、続いて松代にも教会がつくられました。

明治10年代には、キリスト教関係者により、上田・松本・飯田などに禁酒会がつくられ、同20年代になると社会の悪い風俗を改めようとする運動に広がっていきました。

こうした活動のなかで、人格形成をめざす私立学校が設立され、外国人宣教師は近代的登山などを含め、県内に新たな文化をもたらしました。　（児玉卓文）

小諸義塾（移転復元　小諸市）

地元の要請を受けて、牧師木村熊二（きむらくまじ）を塾長に、中等教育機関として 1893年（明治26）に開校した。
宗教教育はおこなわなかったが、「品性の教育、人格の教育」が実践された。木村に招かれた島崎藤村は、ここで国語と英語を教えた。

戦時下の祈り

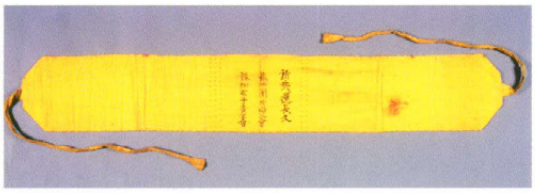
奉納額（千曲市　武水別神社蔵）

日中戦争の勝利を願って奉納した額。「戦勝」の文字は、奉納した人の名前が書かれている。

出征するときの写真

（奥村賢三氏提供）

記念写真が撮られた。



千人針（当館蔵）

兵士の無事を祈る千人針。一針一針心をこめてぬった。「武運長久」と書くほかに虎は千里をかけるとしてデザインに取りいれることもある。

慰問文（当館蔵）

小学生だけでなく、高等女学校の生徒も書き、友だちのお父さんあてに書くこともあった。

◆兵士の無事を祈る

戦争により、多くの人びとが兵士として戦場に行きました。長野県内各地で戦勝祈願がおこなわれるとともに、戦場へ向かう兵士の無事を願って千人針などがつくられました。千人針は多くの人に布へ一針ずつ糸を通してもらうものです。戦場では常に腹に巻き付けてお守りにしていました。

各学校では兵士の無事を祈る慰問文が書かれました。それ以外にも、兵士に戦果をあげてほしいことや、自分たちのようすなどを手紙にして慰問袋のなかに書きこみました。内容は自由に書けず、空襲を受けたことや不作になったことなど兵士を不安がらせるようなことは禁止されました。兵士たちに安心して戦ってほしいという願いがこめられたのです。

出征兵士の無事を祈る
（熊谷元一写真童画館蔵　熊谷元一氏撮影）
知り合いの出征兵士の武運長久を祈って近所の村もまわった。1938年（昭和13）下伊那郡三穂村（飯田市）

戦没した愛馬の碑
（熊谷元一写真童画館蔵　熊谷元一氏撮影）
兵士だけでなく、馬も戦争に行き、犠牲になった。写真は愛馬を供養するために建てた。1938年（昭和13）下伊那郡会地村（阿智村）

◆兵士の思い

兵士たちはどのような気持ちで戦地へ行ったのでしょうか。戦争へ行くときの奉公袋のなかには遺言や遺髪などを入れて行く場合もあり、決死の覚悟でした。戦地からは、家族にあてて元気にやるようにと手紙や葉書を書いています。

特攻隊として敵に体当たりをしていく兵士もいました。20歳前後の兵士たちが死を前にして遺書を残しています。学童疎開で温泉旅館に泊まっていた子どもたちが、翌日特攻に飛び立つ兵士に出会ったという例もあります。その兵士は子どもたちに未来の日本を頼むという言葉を残したそうです。

戦争中は言論の表現が制限されましたが、家族を思う気持ちは互いに通じあっていました。　（田村栄作）

遺言状の入った袋を受けとった倉田さん
（長野日報社提供）
兵士のなかには出征前に遺言状を書き、奉公袋に入れて戦地へ持って行ったものもあった。所在が分からなかったが、倉田さんの遺言状は60年ぶりにもどってきた。

戦闘機に乗りこむ秋山さん
（「長野県民100年史」から転載）
特攻隊員としてB29に体当たりをし、生還した秋山さん。戦後は戦争の悲惨さについて語り継いでいる。

明治以後の善光寺

善光寺参詣絵馬
（千葉県いすみ市　清水寺蔵）　明治時代

善光寺参詣を記念して奉納された絵馬。善光寺本堂で手を合わせる参詣者の姿が描かれれている。先達以外はすべて女性であり、その名前が記されている。

仏閣型の長野駅舎と如是姫像　（長野市）

1936年（昭和11）の善光寺ご開帳に合わせて建設された、三代目の長野駅舎。善光寺にちなみ仏閣型をしている。長らく長野市のシンボル的な建物であったが、1998年（平成10）の駅舎改築で姿を消した。如是姫は善光寺縁起に登場する月蓋長者の娘。現在の像は1948年（昭和23）に再建された二代目如是姫像。

◆鉄道の開通と善光寺参り

明治維新の改革で善光寺は寺領を失うなど苦しい状況に陥（おちい）りました。しかし、人びとの移動が自由になったことに加え、明治20年代に鉄道が開通したため、参詣者は飛躍的に増えていきました。

千葉県のお寺に、善光寺参詣を記念して奉納された明治から昭和の時代にかけての絵馬が多数掲げられています。ここには善光寺でお参りする多くの女性の姿が描かれており、女性救済の寺という性格は変わっていません。ただ、宿坊に泊まらず、参詣のあとは周囲の温泉地に向かう旅が増えるなど、時代の変化とともに善光寺参詣の形も変わってきました。

1936年（昭和11）につくられた長野駅舎は善光寺にちなみ仏閣型（ぶっかく）でした。駅舎の形は変わりましたが、駅前では今でも如是姫像（にょぜひめ）が迎えてくれます。

お数珠頂戴　（善光寺事務局提供）
お朝事の儀式の際に上り下りされるご住職に、参道の参詣人が数珠で頭をなでてもらう。

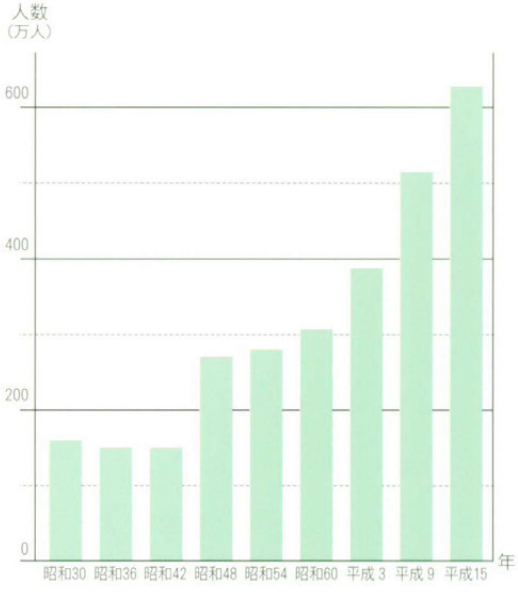
御印文頂戴　（善光寺事務局提供）
善光寺の宝印である御印文を頭に押してもらうと極楽往生できるという信仰がある。

◆善光寺信仰の現在

善光寺の行事には昔からの形を残すものもあれば、時代のなかで変わってきたものもあります。今でもお朝事（あさじ）には、早朝にもかかわらず多くの参拝者が並び、数珠（じゅず）を頂きます。御印文頂戴（ごいんもんちょうだい）にも多くの参詣者が足を運びます。しかし、善光寺の伝統であったお籠（こ）もりは、明治時代後半におこなわれなくなりました。

明治時代なかば以降、御開帳は6年毎、子と午の年とされましたが、昭和30年以降は丑と未の年におこなわれるようになりました。終戦直後（昭和26年）の御開帳はわずか4万5000人という参詣者でしたが、戦後の復興や経済成長とともに参詣者数は増え続け、2003年（平成15）の御開帳では600万人を超えています。

初詣（はつもうで）に善光寺を詣でる老若男女は引きもきらず、善光寺への納骨や永代経回向を望む人も減ることはありません。極楽往生を求める人びとの心のなかは、昔も今も変わらないようです。　（中條昭雄）



戦後の善光寺御開帳参詣者数の変遷
（善光寺事務局による）

諏訪社の今

上社前宮

下社秋宮

上社本宮

下社春宮

（諏訪市博物館提供）

諏訪大社の位置

御神渡りの神事　（諏訪市博物館提供）

諏訪大社には200余を数える年中行事がある。なかでも独特なものに、諏訪湖結氷の亀裂から、農作物の豊凶などを占う御神渡り（写真）や、蛙狩り、筒粥の神事、御頭祭、お舟祭、御田植え祭などがある。

◆今の諏訪大社と神事

諏訪大社は、二つの社と四つのお宮からなります。諏訪湖をはさんで南に上社、北に下社が対座しています。上社には前宮と本宮があり、下社には春宮と秋宮があります。古くからの呼び名、諏訪上社・諏訪下社は明治時代になり、国幣中社諏訪神社に一時統合され、諏訪神社の上社と下社となりました。その後の神社格付けで、大正時代には官幣中社から官幣大社へと昇格しました。戦後の社格制度廃止に伴い、官幣大社の冠ははずされ、「諏訪神社」となりましたが、1948年以降は宗教法人「諏訪大社」と呼ばれています。

古代は狩猟農耕の神として、武士の時代は守護神として、現在は産業や交通安全、縁結びの神として崇められています。

諏訪神社の分社は全国に１万社以上もあり、日本の代表的な神社といえます。

上社の里曳き

昔は女人禁制で、女性は手も触れる事ができなかったが、戦後は老若男女、観光客も自由に参加できるようになった。

◆御柱祭

諏訪大社を象徴するまつりが御柱祭です。７年に一度のまつりには諏訪地域、諏訪社のある地域で重要な地区行事となっています。老いも若きもひとつになって、まつりを執りおこないます。普段は遠くに離れてしまった親戚縁者もこのまつりをきっかけに実家に戻ってきて、久しぶりに集い、ご馳走を食べて、お酒を飲んだり語り合うひとときをすごします。

近年はこの奇祭に興味を持つ観覧者をも含めまつりは盛り上がります。御柱祭のときは知らない人も沿道の家に上がりこみ、一緒になってまつりを楽しみます。

御柱祭は今様に姿を変えながらも、みなが集まり楽しいこと、苦しいことを語り、明日への生き方をそこで考え、学び、悟り、あるべき姿や夢にむかって、祈る機会であるのかもしれません。

諏訪大社、そして諏訪信仰はわれわれにとって、とても身近な「祈り」の存在であるとも言えるのでしょう。

（大竹憲昭）

子ども木遣隊とラッパ隊　（諏訪市博物館提供）

「ここは木落とし、お願いだァ！」という木遣の声が響くと、御柱は土煙をあげて一気に坂を下る。御柱を動かす木遣の一声、子どもたちも負けずに大声がでる（写真上）。ラッパ隊は戦時下の名残と思われるが、今でもやっぱり御柱祭には欠かせない（写真下）。

現代の祈り

初詣（はつもうで）

お正月には近所の氏神様ではなく、善光寺など著名で大きな寺社へ初詣に行く人も多い。

新しい葬送儀礼の考え方

無宗教での葬儀を希望する人もいる。自分が望む葬儀の内容を、元気なうちに書き込む市販の本や冊子も刊行されている。（井上治代著　2002年『新・遺言ノート』）

お墓を守る仕組み（読売新聞社提供）

家単位でお墓を守る仕組みではなく、清内路村は各家でお墓を持たない総墓制（一村一寺一墓）をとっている。清内路村出身で東京周辺に住む人たちは、郷里の習慣にならい東京都八王子市に共同墓地をつくった。

お宮参り（みやまい）

七五三（しちごさん）

◆年中行事と信仰

みなさんは「何か宗教を信じていますか？」と問われたら、なんと答えますか。最近の新聞の世論調査によると、「信じている」23%に対して、「信じていない人」75%でした。「幸せな生活を送るうえで、宗教は大切であると思う人」35%に対して、「そうは思わない」と答えた人は60%という結果でした。

私たちの家のなかには神棚（かみだな）や仏壇（ぶつだん）が置かれ、町のなかには神社や寺院が数多くみられます。人生儀礼や年中行事も、古くからある数多くの行事が、現在に伝わったものです。初詣（はつもうで）、お盆のお墓参り、子供の成長を祈るお宮参りや七五三のお祝い、人が亡くなった場合のお葬式などにその様子がうかがえます。

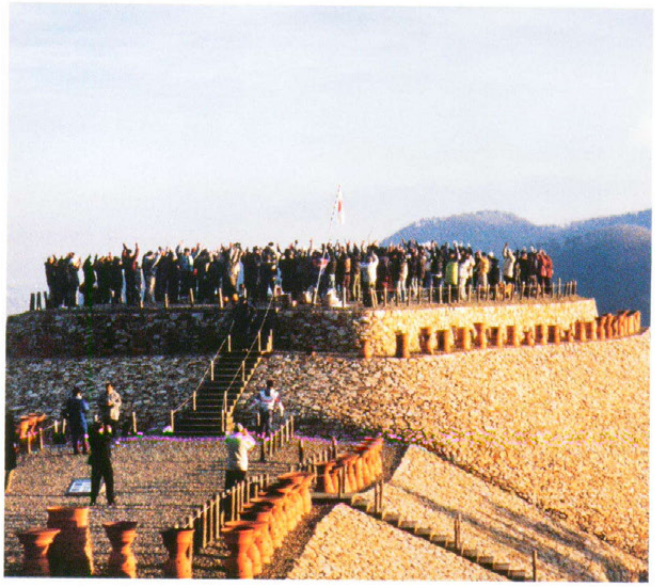
しかしこのような行事を、私たちは習俗や習慣としてとらえていて、そのなかにこめられた「祈り」の意味をあまり意識することはありません。

仏教関係のベストセラー

五木　寛之 著
1998年『大河の一滴』　252万５千部

瀬戸内寂聴 著
1999年『寂聴　仏教塾』　30万部

梅原　　猛 著
2002年『梅原猛の授業 仏教』19万部



「初日の出、万歳」
（長野市　小山実氏撮影　千曲市観光協会提供）
森将軍塚古墳（千曲市）の上で、初日の出を拝む人びと。

◆祈る心

しかし一方で、「神や仏にすがりたいと思ったことがある人」は54%にのぼりました。仏教関連の本がベストセラーになり、座禅（ざぜん）や写経（しゃきょう）の会に参加する人や、滝行（たきぎょう）などの厳しい修行を体験しようとする人の数も増えています。

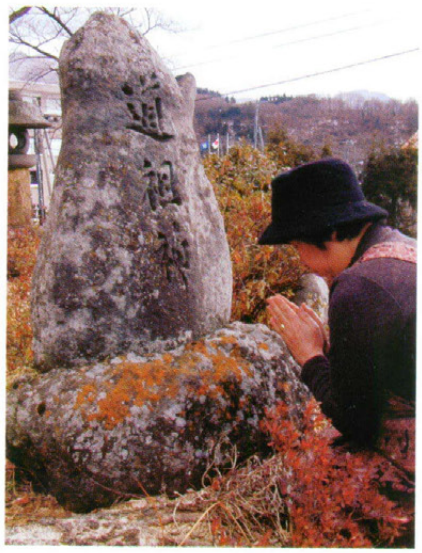
「神仏に頼りたい」「心の安らぎを得たい」と願う人の数は、少なくはないようです。

ご来光を拝んだり、合格を祈願したり、寺社に絵馬（えま）を奉納する、また町のなかに祭られた道祖神にそっと手をあわせる「祈る心」は、現在も私たちの心のなかに息づいているのです。

（霜田英子）

※（文中%は、読売新聞2005年９月２日「宗教」本社全国世論調査より）

絵馬
神社や寺院の境内に、さまざまな願いが書かれて吊り下げられたもの。



道祖神に手をあわせる

参考文献

著者・編者	文献名	発行者	発行年
諏訪教育会	『諏訪の近世史』	諏訪教育会	1966
坂井衡平	『善光寺史』上・下	長野市教育会	1969
信濃毎日新聞社	『諏訪大社』	信濃毎日新聞社	1980
長野県教育委員会	『歴史の道調査報告書Ⅲ―北国街道―』	長野県教育委員会	1980
宮坂光昭・浅川清栄	『図説・諏訪の歴史』上	郷土出版社	1980
長野県教育委員会	『歴史の道調査報告書Ⅵ―善光寺道―』	長野県教育委員会	1981
長野県教育委員会	『歴史の道調査報告書Ⅶ―伊那街道（三州街道）―』	長野県教育委員会	1981
長野県	『長野県史　考古資料編』	長野県史刊行会	1982
郷土出版社編集部	『激動の写真ドキュメント長野県民一〇〇年史』第四巻	郷土出版社	1984
郷土出版社編集部	『信州の仏教寺院』第Ⅲ巻	郷土出版社	1986
長野県	『長野県史　通史編』第三巻	長野県史刊行会	1987
諏訪市史編纂委員会	『諏訪市史』中巻	諏訪市	1988
宮坂光昭	『諏訪大社の御柱と年中行事』	郷土出版社	1992
熊谷元一	『熊谷元一写真全集』第一巻［戦前編］	郷土出版社	1994
松本市教育委員会	『松本市高宮遺跡』	松本市教育委員会	1994
長野県立歴史館編	『信濃の風土と歴史③　中世の信濃』		1997
川上村誌刊行会	『川上村誌資料編　秋山　川上百樹家文書』中	川上村教育委員会	1999
長野市立博物館	『第45回特別展　村人の祈りと集いの場～お堂の役割を探る～』	長野市立博物館	2000
小林計一郎	『善光寺史研究』	信濃毎日新聞社	2000
信濃毎日新聞社	『諏訪人と風土』	信濃毎日新聞社	2003
戸隠神社	『図録　戸隠信仰の世界』	戸隠神社	2003
佐久市教育委員会	『聖原遺跡第２分冊』	佐久市教育委員会	2003
小林純子	「講演要旨　諏訪信仰と御柱」（『須高』第59号所載）	須高郷土史研究会	2004
五味文彦	『中世社会と現代』	山川出版社	2004
長野市立博物館・真田宝物館	『川中島の戦い　いくさ・こころえ・祈り』	長野市立博物館・真田宝物館	2004
井原今朝男	『中世民衆と寺院』	臨川書院	2004
国立歴史民俗博物館	『国立歴史民俗博物館資料調査報告書一四　戦争体験の記録と語りに関する資料調査二』	国立歴史民俗博物館	2004
長野県埋蔵文化財センター	『長野県埋蔵文化財センター年報』20	長野県埋蔵文化財センター	2004
飯田市美術博物館	『中世信濃の名僧』	飯田市美術博物館	2005
高山村誌編纂委員会	『信州　高山村誌』第二巻	高山村誌刊行会	2005
浅科村史編纂委員会	『浅科村史』	浅科村史刊行会	2005
倉澤正幸ほか	『信濃の古代・中世の仏教文化と関係遺跡』	上田市立信濃国分寺資料館	2005

協　力　者

青木廣安

秋山久衛

安養寺

飯田市教育委員会

飯田市美術博物館

井口喜源治記念館

上杉神社

上田市教育委員会

上田市立博物館

上田市立信濃国分寺資料館

雲峰寺住職　佐竹明心

大町市教育委員会

小口哲男

奥村賢三

小谷村教育委員会

郷土出版社

熊谷元一

熊谷元一写真童画館

倉澤正幸

倉田一雄

慶應義塾大学三田メディアセンター

光明寺（天野義光）

小林純子

小林真寿

近藤克則

坂城町教育委員会

佐久市教育委員会文化財課

島田喜八

島田哲男

常安寺

定額山甲斐善光寺

諏訪市教育委員会

諏訪市博物館

諏訪大社上社本宮社務所総務課

善光寺事務局

高野弘太郎

大雄寺

武水別神社

知恩院文化財保存局

千曲市更埴観光協会

千葉県いすみ市清水寺

長念寺

東京大学史料編纂所

戸隠神社

富山県立山博物館

中野市教育委員会

長野県埋蔵文化財センター

長野市立博物館

長野日報社

仁科神明宮

羽毛田卓也

波田町教育委員会

北信ローカル

町田勝則

松本市教育委員会

南アルプス市教育委員会

宮川孝男

読売ニュース写真センター

霊泉寺

和田守

あとがき

この本を読んでもっと知りたいことが出てきたら、ぜひ県立歴史館へ来てください。収蔵している資料の閲覧ができますし、館にある書籍で詳しく調べることもできます。また専門の職員がみなさんの質問にお答えをしています。

最後に本書のために、貴重な写真や資料などを快くご提供くださった多くの方がたに厚くお礼申し上げます。

2006年3月

長野県立歴史館

執筆者・編集者（五十音順）

伊藤友久	太田典孝	大竹憲昭	大橋昌人
岡村秀雄	唐澤　敏	川崎　保	黒岩龍也
児玉卓文	小柳義男	酒井健次	下崎誠一
霜田英子	滝澤正幸	谷　和隆	田村栄作
中條昭雄	成竹精一	堀内敏治	本多得爾
水沢教子	宮下健司	村石正行	

利用案内

開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日　毎週月曜日（祝日、振替休日にあたるときは火曜日）と祝日の翌日
12月28日～1月3日、その他館長の定める日

常設展観覧料　一般300円（200円）、高・大学生150円（100円）、小・中学生70円（50円）　/（　）内は団体20名以上
次に該当する場合は観覧料が無料となります。
・小・中・高・自律学校生が土曜日、日曜日、国民の祝日及び振替休日に観覧するとき。
・身体障害者手帳などの交付を受けている方と介護の方が観覧するとき。
・県内の小・中・高校生が学校の教育活動として観覧するとき。この場合申請が必要であり、申請書類は当館ホームページでも手に入れることができます。

交通案内　しなの鉄道屋代駅から徒歩25分、屋代高校前駅から徒歩25分
長野電鉄屋代線東屋代駅から徒歩20分
長野自動車道更埴I.Cから車5分
高速道路バス停「上信越道　屋代」から徒歩3分

長野県立歴史館

信濃の風土と歴史⑫
いのる人びと－信仰と祭り－

2006年（平成18）3月24日発行

編集・発行　長野県立歴史館
〒387-0007　長野県千曲市大字屋代字清水260-6
電話　026-274-2000（代）
FAX　026-274-3996
URL　http//www.npmh.net
印刷　株式会社プラルト
〒399-0033　長野県松本市大字笹賀5985